

希望 この手に

沖縄の貧困・子どものいま

第2部 ⑨

奨学金返済

総額700万円以上の奨学金返しが印字された女性の奨学金書類。「返したいが、お金が足りない」と返還猶予を願い出た



沖縄本島南部の女性(29)は日本学生支援機構の奨学金を利用して県内の大学、大学院で6年間学び、約820万円の借金を背負った。「すごい額ですよ」とあきれたような表情を浮かべるが「借りなければ学べなかった。入学前に戻ったとしても絶対にまた借りる」と力を込める。大学進学へ親からの援助は望めなかった。学費も1人暮らしの生活費も自力で賄った。大学1年時はバイトだけで頑張った。だが時給は当時の最低賃金の610円。働き詰

めで働いても学費と生活費の両方を支えるのは厳しく、大2年になると単位を落とし、やむなくバイトを減らして奨学金を借りることにした。

「もっと学びたい」と進学した大学院では「勉強すればするほどお金がかかった」。専門書は古本を集めても2年で20万円以上。パソコン購入

を借りて額を増やした。

返済総額が800万円を超すが、借りたのは733万円。差額は返済20年間の利息約85万円だ。さらに借りる際、親族などに保証人を頼めなければ、保証機関が連帯保証する「機関保証」を付けねばならず、貸与額の数パーセントが保証料として天引きされる。女性も総額数十万円が

日本の教育は国際的に見て私費負担が重い。大学など高

借金820万円／返済20年、利息85万

低賃金の中で厳しく

代など出費はかき、真面目に学ぼうとすればバイトの時間はない。さらに別の奨学金

引かれたが、返済にはそれも含めた全額が請求される。

奨学金返済の延滞が継続している理由 (2014年度、複数回答)



日本学生支援機構 14年度「奨学金の返還者に関する調査結果」

女性は現在、年収300万円未満を対象とした返還猶予の制度を使っている。「返すのは当然で、踏み倒そうなんて思っていない。でも絶対的にお金が足りない。学費が諸外国並みに下がれば返済問題もなくなるのに」と切に願う。

は14年度は4・6%。延滞が継続している理由には「本人の低所得」「奨学金の延滞額の増加」「親の経済困難」などが挙げられる。重い自己負担をして大学で学び、卒業後には厳しい就労状況や、貧困にある親を支えながら奨学金返済に苦しむ日本の大学生の姿が浮かび上がってくる。